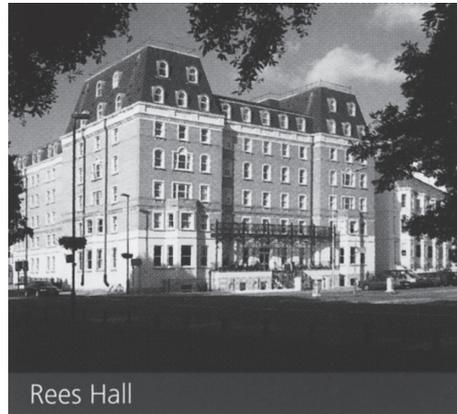


イギリス・ポーツマス大学海外研修報告 (2009年度)

小沢 一彦

- ◇ 研修期間：2009年4月1日～2010年3月31日
- ◇ 場所：ポーツマス大学 (ポーツマス、イギリス)
- ◇ テーマ：バルカン情勢 (主に旧ユーゴスラビア地域研究)、イギリスの政治システム、欧州統合の現状研究など



Rees Hall

2009年度の海外研修制度を活用し、国際関係、国際平和協力研究の立場から、イギリス南部の港湾都市にあるポーツマス大学に1年間、「客員研究員」として籍を置きながら、日英議院内閣制度、欧州国際関係、比較政治体制などの調査研究を実施した。ヨーロッパ地域でも使用可能な英語圏であること、そして1年間の「客員研究員」の受け入れ用意があることがその選考理由である。

ポーツマス大学は、イギリスの南西岸の大西洋に浮かぶワイト島の対面に位置している。近くのポーツマス港は歴史的な軍港でもあり、ネルソン提督の艦隊HMS ヴィクトリーなどの母港でもあった。現在はビーチの広がる落ち着いた街で、周辺人口は約20万人。大学生と院生を合わせて1万5千名ほどが、散在するキャンパスで学び、最近できたビジネススクールの人気が高まっている。私は、大学内に「客員研究員」用の大部屋と、「客員教授」用の個室の二室を与えて頂くことができ、充実した研究生活を過ごすことができた。

「国際紛争がなぜ絶えないのか」は回答の困難な問題であるが、イギリスを拠点に欧州各地において解決にいたるヒントを見つけたかった。学生の頃、世界史の授業で「バルカンはヨーロッパの火薬庫」と学習して以来、なぜこの地域で長らく紛争が絶えないのか、自分なりに情報を集めてきたつもりだが、いずれは現地現場を訪ねて、自分の目で見るのが不可欠だと考えていた。さらに、その「火薬庫」ぶりを見せつけた、2000年の10月放映の「NHKスペシャル」で取り上げられたユーゴスラビア内戦を描いた作品である、『民族浄化～ユーゴ・情報戦の内幕～』は、私に改めて大きなインパクトを与えた。この作品は、今回の命がけの現地現場調査を実施する上で、また長年にわたって世界秩序形成原理の変動に翻弄されてきた、民族紛争が絶えない「火薬庫」と呼ばれてきた理由やそうしたことへの疑問、問題意識について理解を深めてくれたように思う。

こうしたことから、今回の研修目的、問題意識は、主にヨーロッパ全体の政治経済的

安定を含めた今後の動向で、1)「21世紀型危機」に直面する政治経済統合の進むヨーロッパは、衰退しつつある「覇権国」アメリカの代替となりうるのか、2)「東アジア共同体」のモデルとされる、ヨーロッパ連合(EU)を中心とする欧州政治経済統合は本当にうまく行っているのか、3)なぜ「バルカン半島は欧州の火薬庫」だったのか、4)なぜ、旧ユーゴスラビア紛争はあそこまで熾烈で激化したのか、5)移民も急増し宗教的民族的对立も激化する中、トルコ、バルカン諸国、旧ソ連諸国を含めた「拡大ヨーロッパ」は今後どうなっていくのか、6)EU周辺国の財政危機や共通通貨ユーロの将来について、などである。

結論を先に述べると、ミサイル防衛を含めてロシアに対抗しながら、政治経済統合を急激に推進し、27カ国にまで拡大を続けてきたヨーロッパの未来は不透明なままである。特に、「財政破綻危機国家」の救済や、中心と周辺の経済格差是正を含めた経済の立て直しが、当面の優先課題である。仮にそれに失敗すれば、ユーロという共通通貨は破綻するし、また、それに成功すれば、過去の歴史的蓄積の上に、まだ人類社会の経験したことのない、新たな民主的な「21世紀型・超国家共同体」を築く「苦難の過渡期」ということになろうか。英米関係を重視し、やや様子見で距離感のあるイギリスは別にして、経済余力のあるドイツやフランスによる周辺国支援が今後のカギを握るのではないか。

地理的要因や二度にわたる諸民族の大移動に加え、歴史を遡れば395年にローマ帝国がイタリア半島東で、主にゲルマン、ラテン語属系とスラブ語属系の東西に分裂したことや、神聖ローマ帝国領とハプスブルグ領に分かれていたこと、さらにはロシアの南下政策への西欧諸国の牽制などに、その対立の根深さの理由が隠されているように感じる。「ヨーロッパは一つだ」と日本ではよく耳にするが、実際に現地現場観察を行うと、ドイツやフランスなどの豊かな「中心部」と、ギリシアを筆頭とするソブリン・リスク、財政危機による緊縮財政政策に対する、最近のストライキ・暴動に見られるように、失業と貧困、財政破綻に苦しむ「辺境部」に二極化しているのが現状だ。

なお、研究方法としては、まずはポーツマス大学での専門家への相談とヒアリングから、できるだけ安全に支障のない範囲で、訪問先の気候・季節の良い時期に、旧ユーゴスラビア諸国やその周辺を訪ね、現地現場での観察やインタビューを実施した上で資料を収集。そして、イギリスに戻ってから、東欧の専門家に疑問をぶつけ大学図書館の文献や資料と照らし合わせながら、「海外研修報告書」を作成するという段取りにした。

筆者は現代日本政治や、国際関係論、比較政治体制論などが専門であるが、ヨーロッパ地域研究に関しては全くの門外漢である。2009年度の海外研修(サバティカル)に際し、ご縁があってイギリスの大学に籍を置くことになったため、急遽、かねてよりの問題意識のあった、ヨーロッパ研究やバルカン諸国周辺情勢の調査研究のためもあって、イギリスでの指導教授や欧州やロシアの専門家にアドバイスを受けながら、詰め込みでこの周辺地域の勉強をし直したのが正直なところである。紙面の都合上、研究内容そのものの発表は別誌に寄せることにするが、この地域について長らく研究しておられる先輩諸氏には、私

の得た知見や内容に間違いや誤解があれば是非ともご教示ご指摘頂きたい。

また、こちらの大学で籍を置くことを認めて頂いた事務総長のファーガス・カー氏のご厚意や、指導教授であった、ポール・ラスタール元大学院教授をはじめポーツマス大学の専門家とも十分相談の上、「東欧・バルカン諸国大遠征」の計画を練ったことも、感謝の気持ちとともに改めて付記しておきたい。バルカン諸国や東欧については、英語による資料や文献、またビデオ類を駆使して研究を積んだほか、保存書籍の増加により大英博物館近隣から移動した、キング・クロス、セント・パンクロス駅の大英図書館や、ギリシアとパルテノン神殿の発掘品の返却問題を抱える大英博物館、また、ポーツマス大学図書館にもお世話になった。さらに、欧州各国の博物館やイギリスのBBCの「歴史」番組なども2009年までに発見発掘された最新の資料を提供し、この小論を書くにあたって非常に参考になった。

学生時代からの「バルカンはヨーロッパの火薬庫」という国際政治上の疑問を解決すべく、現地現場に立ち入ることによって、「バルカン・東欧大遠征」の所期の目標は果たすことができた。1991年より分裂し始めた、旧ユーゴスラビアについても、いまだに戦火の絶えないコソボやボスニア・ヘルツェゴビナを除いて、全て回ることができた。史上初の建国となるスロベニアや、訪問時にはまだ独立3年目のモンテネグロなど、新しい国家建設の希望と、今後うまく経済運営ができるのか否かの過渡期に観察の機会を得たことも良い体験だった。毎月のようにデモやストライキが続いていたバルカン半島最南端のギリシアなども、観光以外に主だった産業は限られ、財政危機や国際的借金に追われ債務不履行の危険性すら指摘されている。

1990年代中心の20万人が亡くなったこの地域の民族紛争を見ていると、歴史的、政治的、経済的な対立要因としては、1)「20世紀型世界システム」の終焉で、旧諸帝国の「重し」や米ソ冷戦の緊張がなくなり、少数民族も自己主張し始めたこと、2) 19世紀までの「諸帝国」時代の無理な国境線の引き方が、いまだに「民族」(エスニック・グループ)の壁を越えて紛争の種を残していること、3) 民族自決主義のもと、自国民の利益のみを優先したため、領土を拡張したり、他民族を追い出したりなどの「民族浄化」や「言語浄化」が行われたこと、4) 世界金融恐慌前までは、西欧諸国からの安上がりの労働力地域としての投資が舞い込んだが、2008年のサブプライム・ローンの崩壊後は、急速に投資は大幅に落ち込んだこと、5) まだ、国家建設や市場経済化にも慣れていない国も多く、政治的腐敗もあって、インフレや失業、経済格差が放置されたままになっていることなどである。現在は、国連軍やNATO軍が停戦監視や紛争抑止機能を果たしているが、果たして外国の部隊が撤収した場合に、自分たちで平和的に独立の上、統治ができるか、コソボ問題だけを取り上げても不安材料にこと欠かない。

以上見てきたように、欧州がここまで発展するのに費やしてきた人命や財産は膨大なものである。先にも見たように多様な矛盾が解決するまでには、まだ時間がかかるのは承知

であるが、歴史的、宗教的、民族的な深刻な諸矛盾を抱えながらも、近代に入り3度も戦争をした「ドイツとフランスが仲良くなった」事例を胸に、バルカン・東欧諸国はEUという枠組みの中で、平和協力・連帯の精神によって、「21世紀型の地域統合ガバナンスモデル」の平和的創造と経済復興に全力を尽くさねばならないのではなかろうか。

最後に、この貴重な海外研修の機会を与えて下さった桜美林大学学長・理事長の佐藤東洋士先生ほか、不在中にご迷惑をおかけしお世話になった職場の同僚の皆様にも、心より感謝御礼申し上げたい。